
No One Knows Everything

新藤悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No One Knows Everything

【Nコード】

N7024Y

【作者名】

新藤悟

【あらすじ】

僕に何ができるというのだろうか。未来を見るしかできないこの僕に――

毎日を怠惰に過ごす高校生、空深・夜のクラスにある日、転校生がやってくる。その転校生、浅海・圭はある目的を持って夜のいる街にやってきた。

圭の秘密を知ってしまった夜は、半ば強制される形で彼女に協力を約束する。

この作品は投稿サイト「Arcadia」様にも投稿させていただきます。

- O t h B a d D r e a m B e l i e v e r -

- O t h B a d D r e a m B e l i e v e r -

雨がひどく降っていた。

とても、とてもひどい雨で、そしてとても冷たい雨だった。

それが僕の頬を打つ。叩きつける様に打ちつける。痛いくらいに激しいけれど、今の僕にはそれを感じることはできない。

空を見上げる。仰向けで見上げるそれはとても狭くて、とても黒かった。

遠くで雷が鳴った。一瞬だけ稲光が眩く光って、遅れて雷鳴が響く。体が動かない。寒い。痛みは、無い。

湿った草と土の匂いがする。それは最近嗅ぐことが少なかった雨の匂いだ。雨の香りが鉄臭い匂いに混じって僕の中へと入っていく。だけど、ダメだ。眠い。閉じていくまぶたと一緒に香りも去っていつて、僕はもう何も感じなくなっていた。ただ聴覚だけは最後まで残っていた。段々と小さくなっていく周囲の音の中で、どこからか甲高い音が響いていた。その音さえ小さくなっていつて、やがて消えた。

「おい、君！ 大丈夫か！？ おい！」

いい感じで眠ってしまいそうだったのに、誰かに体を叩かれる。何
度も何度も耳元で叫んでどうにも眠れない。だから僕は閉じたまぶ
たをゆっくりと開いた。

「良かった、生きてる……！　おい！　こっちだ！　こっちに担架
を回してくれ！」

眼を覚ませば男の人がずぶ濡れでいた。レインコートを来て、よく
見えないけど頭にはヘルメットをかぶっているらしい。男の人は膝
をついて、僕に話しかけ続けた。でもよく分からない。何を言っ
ているのだろうか、この人は。僕はただ眠ろうとしていただけなのに
眠気に負けて再度まぶたが閉じようとする。だけど、男の人はそれ
を許してくれない。まぶたが下がりがけるその度に体を叩き、耳元
で大声を叫ぶ。

「もう大丈夫だぞ、すぐ助けてやるからな……おい！　早くしろ！」
「待ってくれ、今行く！」

寝ている僕のすぐそばに真っ白な担架が運ばれてきた。雨が弾けて
シートがあつという間に濡れていく。僕は男の人に両脇を抱えられ、
寝ていた場所から引きずりだされると、その冷たいベッドの上に寝
かされた。

「君！　どこか痛いところはあるか！？」

どこも痛いところなんて無い。だからもう僕を寝かせてくれないか。
そんな気持ちを込めて首を横に振った。すると僕に話しかけてきて
いた男の人の汚れた顔が少し緩んだのが分かった。

手で合図されて僕を乗せた担架が何処かへ運ばれていく。雨の音に

混じってカタカタとキヤスターが音を奏でる。

遠くでもう一度雷鳴が響いた。

白い、車に僕は向かっていく。真っ赤な赤色灯が夜に近い世界を染めあげていた。

「そっちはどうだ？」

「……ダメだ。心音も脈も確認できない。とにかくまずは車から外に出すぞ！」

その声に僕は少しだけ顔を動かした。うすばやけた視界の中に、ひしゃげてひっくり返った車が入ってきた。そこから引き摺り出された一組の男女。だけど、二人共だらりとしていて、ちっとも動きやしない。

「だから……言ったのに」

今日は遊びに行くのは止めようって。きっと良くないことが起きるから家に居ようって言ったのに。なのに、父さんも母さんも頑固なんだから。

（せっかく久々に夜と一緒にいれるのに、遊びに行かなくてどうするんだ！？）

（いつつも夜ちゃんには寂しい想いさせちゃってるんだから、今日くらいは母親らしいことをさせて。ね？）

そんな事言うもんだから、僕も断りきれないで。きつと何も起きないだなんて、そんな有り得ない空想を信じてしまったんだ。

自分が犯してしまった罪。とても痛くてとても悲しくて、なのにため息も出ないし、涙も出ない。

担架が揺れて、扉が閉まってく。それに合わせて僕も眼を閉じた。

救急を告げる音が何処か遠く聞こえる。

全ての感覚が消えて行く中で、僕は思った。

僕は、無力だ。

- 1 s t 浅い空、深い海 - (前書き)

感想を頂けたら嬉しいです。宜しくお願い致します。

- 1 s t 浅い空、深い海 -

- 1 s t 浅い空、深い海 -

朝なんてものは黙っててもやってくる。どんなにやってこなくていいと思っけていても胸糞悪いまでに呆気無く朝日なんてものは昇り始めて、外が曇りだろうが土砂降りだろうが僕という存在を眠りというこれ以上ない最高に快適な状態から覚醒させてくれる。例えば窓際に垂れ下がるカーテンが遮光性の強いものであっても、だ。まったくもって有難迷惑千万。そのまま寝かせておいてくれてもいいのに。

とはいえ、人は一日寝たままではいられない。赤ちゃんには赤ちゃんなりにやらなければならないことはあるし、成長すれば成長するだけそれは増える。それは当然僕という人間にも当てはまるし、残念なことにそれをしないと年長者からのゲンコツか叱責というありがたくも何ともないものが降り掛かってくる。

朝からそんなものを受けたいほどに僕は人生に退屈はしていないし、だから一度開いたまぶたがまた閉じてしまわない内に無理矢理に体を起こした。

「……………」

だからといって本当の意味で眼が覚めるかといえばそうでもない。まぶたは半開きだし、頭は全くといっていいほど働きやしない。敷きっぱなしの煎餅と化した布団の上に鎮座すること五分。ようやく僕は活動を始める。

ノロノロとした足取りで水漏れがしてそんな風呂場へ。シャツとトランクスを脱ぎ捨てて蛇口をひねる。そして必ず浴びるのだ。熱湯を。

「あちゃちゃちゃちゃちゃちゃっちゃっちゃい！！」

どういう原理なのかはサッパリなのだが、ウチのシャワーは水をひねっても最初に熱湯が出てくる。ここに住み始めてもう相当になるのだからいい加減学べばいいのにと我ながら思うけど、やってしまふものは仕方がない。だって朝は頭が働かないのだ。それほどまでに僕は朝が弱い。

温度がようやく落ち着いたシャワーで覚醒し、寝ぐせだらけの茶色い髪の毛を整える。十分くらい浴びると、風呂場で歯を磨いて、前日の夜に準備してあった着替えを手にとって、使い捨てのコンタクトを付ける。アクビを堪えながら真つ黒な、もうすでに時代錯誤と言いか骨董品、生きた化石に等しい学ランを着替えると、また布団の上に座ってテレビを見ることしばし。面白くも何ともない、ニュースなのかバラエティなのか情報番組なのかサッパリ分からないテレビを眺めてから家を出た。

ようやく動けるようになったとは言っても眠いものは眠い。アクビで眼に溜まった涙を右手で拭いながら自分が出てきた建物を見る。木造の誰がどう見ても、百人聞けば百人がボ口屋と答えるだろう古ぼけたアパートが風に吹かれて軋み音を立てている。当然毎日見ているものだから見慣れてはいるのだけれど、この築何十年か分らない建物がどうして未だに崩壊せずに残っているのかが不思議でな

らない。今この瞬間に崩れてもおかしくないと思う。もっとも、そうだったら困るのは自分ではあるが。

何十回とアクビをしながら、すっかり主流になった電気自動車から流れる、ガソリン車の擬似エンジン音を耳にしつつ十五分も歩けば我が母校が見えてくる。天気は快晴とは行かず、晴れてるとも曇っているともいえない微妙な状態。寝ているのか起きているのか分からない、さながら我が頭脳といったところか。

誠に当たり前ながら学生というのは僕だけでは無いので、校門の前には続々と他の生徒が集っている。さすがにココまで来れば眠いといってもある程度眼は覚める。校門の前は騒がしいけど、僕が近づくと同時にみんなの空気が若干硬くなるのが分かる程度には。

「うつす、夜。おはよう。相変わらず眠そうな顔してんな」

「あゝ……真か。おはよう……」

下向きの顔を上に向ければ、頭ひとつデカイ真——朝霧真がいた。見ると眩しくなるくらいに金色に染めた、ツンツンに突っ立った髪の毛が見える。

真は僕の頭に手を乗せてグシャグシャと撫で回した。

「朝なんだから元気だせよ！ 一日がもったいないじゃねーか。あ、でもお前は一日中眠くてもしょうがねーのか。名前が『夜』だけに」「名前の事はほつとけ。あと、そんなドヤ顔されても全然うまくないからな。ついでに言うとその手のネタはとづくに使い古されてる」

何せ生まれた時から「夜」なのだから17年間散々イジられてきた。最初はイヤでこんな名前を付けた我が親をちよつと恨んだりもしたが、もうすっかり慣れきってしまったし、この歳になってまでそんなイジリ方をするような奴はいない。真以外には。

「いつまで経っても色あせない鉄板ネタ！ 生まれつき持ってるヤツが羨ましいぜ！」

「色々ツツコミたいところだな……」

とは言え、朝からメンドクサイからツツコまないけど。

そんな疲れる会話を交わしながら毎朝の様に眼を覚まして、気がつけばいつの間にか上履きに履き替えて廊下を歩いてた。隣で真が何やら話しかけてるけど、それを適当にあしらいながら教室へ向かう。

朝の廊下は登校した他の生徒たちで混み合っててざわついているけど、僕ら二人が近づくとピタリと会話を止めて、端っこ避けてそそくさと早足で通り過ぎる。そして僕らと距離ができると、また何事も無かったかの様に話し始めるのを僕は背中で聞いていた。

僕らは学校だと嫌われ者だ。いや、嫌われ者とはちよつと違うか。正確には怖がられてる。僕が通ってる学校は真面目でお固い生徒が多いからか、いわゆる不良と呼ばれる生徒はいない。僕と真くらいだろうか。もつとも僕も真も不良でいるつもりはないけど。いや、真は僕から見ても不良生徒か。本人に自覚は無いだろうけど。

ステレオタイプだけど、髪染めて時々授業サボってれば周囲からは「ヤンキー」に見えるらしい。加えて有ること無いこと噂も広まるから、ますますそのイメージが固まってしまふ。そんなイメージが先行して周囲は僕らが怖いらしいのだ。こんな一六〇cmにも満たない人畜無害な細身の少年のどこが怖いのか、いまいち理解に苦しむけど。

「いやいや、人畜無害じゃねーだろ。聞いたぜ、こないだも工業の奴らに絡まれたんだってな？」

「あー……そう言えばそんな事もあったな。なんか道歩いてるだけで絡まれるんだよな。カモに見えるんだろうな」

「見た目はちびっ子が粹がつてるみたいだしな」

「やかましいわ」

と、何やらペチャクチャと話しかけていると、真が視線を僕から正面へと向けて手をブンブンと大きく振り始めた。

「おっはよー、あかりちゃん!」

そして声の先には小柄な女の人。ショートのに髪にピンクのカーディガンを羽織って、笑顔でこちらに振り向いた。

「あ、夜クンに真クン。おはよう」

クラスの名簿を胸の前に抱きかかえて、微笑みながら可愛らしい声で応える。コツチに歩いてきながら唇を尖らせて、大きな眼を無理やり吊り上げて怒ってますよ、とアピールしながら真に注意する。小柄な体格と幼さの残る顔、それに何となく「フワフワ」って表現が似合いそうな雰囲気のでいで男子生徒からは人気が高い。事実、彼女の怒った顔を見て周囲の男子生徒は顔をニヤつかせながら通り過ぎてる。

「こーら。ちゃんと『三上先生』って呼びなさい。あと、学生服はキチンと一番上のボタンまで止めること」

そう言いながらあかりちゃんは真の首下に手を伸ばした。そして周囲をキョロキョロと見回して誰もコチラに注意を払ってないことを確認すると、唐突に真の顔を引き寄せる。

「……何回注意させたよ、真オ。テメエの頭は鳥並みか、ええ?」
「いやあ、あかりちゃんの……」

「『三上先生』だろお? タマ潰すぞ?」

「ゴメンナサイ……」

ヤクザ真っ青なドスの効いた低い声とともに睨みつけられて、真は今日もあかりちゃんに素直です。

「だから、今度からはちゃんとしてきてね？　三上先生からの才・ネ・ガ・イだからね」

真を解放するとあかりちゃんはニツコリと笑ってウインクした。それを目撃した男子生徒が頬を赤らめたりしてるから手に負えない。対象となった真の顔は若干青ざめてるけど。

「相変わらずうまいなあ……」

「何か言った、夜クン？」

「いえ、ただ三上先生は可愛いなあって思っただけです」

「そう？　それなら良し！」

別に被虐願望があるわけじゃないからあかりちゃんには逆らわない。この世界で生きていくためには処世術は大事なのだ。

「何やら騒がしいと思えば、またお前か、朝霧、空深」

あかりちゃんの後ろから小言を言いながら男性教師が近づいてくる。長身・細身で女子生徒にモテる、いわゆるイケメンというやつなのだが、どうにも好きになれない。高圧的な態度で接してきて僕や真を目の敵にしてるし、やたらと男子生徒に敵しい。特に僕と真には、たまに難癖をつけてるとしか思えない時もあるし、ムカツクやつだ。そう言えばコイツの名前なんだっけ？

「別に騒いで無いっすよ。ちょっとあかり……三上先生と話してた

だけじゃないっすか」

「教師に口答えするな。だいたいなんだ、その髪は。空深も。ちゃんと黒くして来いって言っただろうが」

「いやいや、校則だと髪の色まで決められてないじゃないっすか。それに中間テストで全教科平均点取ったら認めてやるって言ったの、先生じゃないっすか」

「見逃してやるとは言ったが、認めるとは言っていない。三上先生ももつと厳しく指導して下さい。担任の三上先生が甘いからコイツらがつけあがるんですよ」

矛先があかりちゃんに向かったところで、あかりちゃんは露骨に舌打ちして顔をしかめた。しかめたっていうか、歪めたっていうか、言葉に出すのはばかられる程スゲー顔をした。向かい合ってた真なんて素で引いてるし。気持ちは分かるんだけど、あかりちゃん、顔崩れすぎじゃね？

「そんな事無いですよ？ 朝霧クンも空深クンも、見た目こそこんな風ですけど、とっても良い生徒です。成績も悪いわけじゃないですし、素行に特別問題があるわけじゃありません」

「しかしその空深もこの前他校の生徒と……」

「アレは向こうに全面的に問題があったということで話が着いたはずです。先生もそれで納得なさったじゃありませんか」

「それはそうですが……」

「ですが、ご忠告として有難く頂戴致します。

それじゃもうすぐチャイムがなりますから失礼しますね。先生もホームルームに遅れますよ？」

口ごもった先生にあかりちゃんは一息にそう告げると、深々と頭を下げた。どんな顔をして話してたのかは僕の位置からは見えなかったけど、さぞかし今はひどい顔をしてるんだろうな。

一方で先生の方はまだ何やら言い足りなさそうに口元をモゴモゴさせてたけど、反撃の糸口が見つからなかったのか、あかりちゃんに見られないように僕らを睨みつけて去っていった。

廊下を曲って野郎の姿が完全に見えなくなるとあかりちゃんは頭を上げて、真は僕をヘッドロックするとワシヤワシヤと髪を撫で回した。

「いやあ、助かったぜ、夜！ お前がこの前のテスト、出るどころ教えてくれなかったら完全にアウトだったぜ」

「アレはたまたまピツタシ出ただけだよ。次からは前以て勉強しとけ。それと、お礼言う相手は僕じゃなくて三上先生だろ？」

「おお、そうじゃん！ あかりちゃんも庇ってくれてありがとう！」「だから名前で呼ぶなと……まあ良い。それよりもさっさと教室に行くぞ」

相変わらず鳥頭の真に、あかりちゃんは今日は諦めたのか深々とため息をついて教室に向かう。たぶん明日もまた同じ光景が繰り返されるんだろうけど。

似たような毎日に退屈しがちな僕だけど、これはこれでいいんだ。あかりちゃんと真のやり取りは面白いし、見てて飽きない。僕は眼を覚ますことができるし、何より、誰も傷つかないから。ここ最近
は悪い > ruby < > rb < 未来 > / rb < > rt < . . > / rt
< > / ruby < も見てないし、これからもずっとこんな日々が続けばいいのに、と二人の背中を見ながらそう思う。悪いこと、嫌なことは忘れて、楽しくて嬉しいことだけ覚えていけたら、どれだけ幸せだろうか。

「なあ……」

そんな事をつらつらと考えながらあかりちゃんの後ろを歩いてたけ

ど、ふとあかりちゃんが僕らの方を振り向いて疑問を口にした。

「あの先生の名前、なんだっけ？」

興味の湧かないものに対しては人なんて何の集中力も持たない。例え興味は無くとも別の原動力、具体的に言えば野心や目標、はたまた義務感や強迫観念でもいい。とりあえずそんな感じで動かすものが無ければ、人の話なんて夢の世界へ誘うだけの、RPGゲームであるような魔法でしか無い。むしろゲームの魔法より強力だ。

退屈な授業を寝て過ごして昼休みになったのはいいけど、僕にはやる事がない。食堂で真と飯食ってしまった後は午後の授業があるまで全くの暇だ。昼休みは大概真はどっかに姿を消すし、他に友達と言える様な奴もいない。教室にいても周りには誰も寄ってこないし、慰めに教室内を見渡してみても大体は仲のいいグループでダベってるか、携帯型ゲームをコッソリと持ち込んで盛り上がってるか、そんな感じ。中には授業で使うPCを好き勝手にいじくって、ゲームなんかをインストールしてる奴もいるけど、周りにITが溢れてるこのご時世になってもコンピュータに教師連中は弱いらしく、今のところバテてないらしい。

幸いにして周囲と距離を取るのは自分としても望むところだし、周りとかに興じている方が個人的には苦痛だから、今の状況は悪くは無いとは思ってる。暇は暇ではあるのだけど。

頭をバリバリと掻きながら僕は教室を出た。気にはならなくても居心地がいいわけじゃない。他者に無関心でも空気は読める。僕が居心地が良くないのと同じように、周りも僕がいるとあまり楽しめないらしい。

「お？」

アテも無くブラブラと、今日も屋上にも行こうかと人気の無い校舎の端にある廊下へと向かっていると、人氣が無いはずの廊下に見覚えのある人影。昼間だというのに節電してるのか薄暗くて、あそこは確か物理室だっただろうか。そこで彼女は両手にプリントを重そうに抱えて、手が塞がってるからか足だけでドアを開けようとしていた。見るからにバランスが悪くて、胸の前で紙が右へ左へと揺れて、彼女もそれに気づいてるのか上半身を左右に揺らして落ちないよう落ちないようにと苦戦してる。まるでヤジロベーみたいに。だけど、ただと残念なことにクラスメートである僕は知っている。彼女に運動神経が無いことを。

果たして、十人この場にいれば十人全員が予想するだろうことを、彼女は期待を裏切ること無くやってのけた。

「何やってんの、森川」

「イタタタタ……あ、空深くん」

強かに打ち付けたお尻をさすりながら涙目で見上げてくる森川。黒髪セミロングの彼女はクラスでも地味な存在だ。休み時間に誰かと話してる姿もほとんど見たことが無いし、ついでに言えば話す時も相手の顔を見ることができない。なるほど、ならば相手が気を抜いていたとはいえ、顔を見て話しかけられた僕は非常に幸運と言ったか。

空からはパラパラと宙に舞ったプリントが降ってきて、パサリと黒

髪の上に落ちてきた。それに気づくと森川は黒縁の眼鏡がズレたま
ま慌てて紙を拾い始めた。

こんなナリだけど、一応僕は自称不親切ではない。珍しく幸運に巡
りあったことだし、他には特にやる事も無いからしゃがみ込んで拾
ってやる。

「そ、空深くん……」

「ん？ 何？」

「えっと、その……あ、ありがとう」

「どういたしまして。それより、パンツ見えてるよ」

「え？ えっ！？」

教えてあげると、両手にプリントを持ったまま森川はスカートを抑
えた。あ、と僕が声を掛ける間もなく、普段の鈍さはどこへやらと
言わんばかりの速度で手は振り下ろされて、これまた予想通りにプ
リントはクシャクシャになってしまう。

「あう……」

さてさて、顔を赤くして涙目になっているのはケツが痛いからか、
恥ずかしいからか、それともプリントを潰してしまったからか。好
きな人ならそんな姿を見て「可愛いなあ、ハアハア」とか心のどっ
かで悶えるのかもしれないけど、残念ながら僕にはそんな趣味も無
ければ興味も無い。気にせず黙ってプリントを集めてやる。

「み、見え、た……？」

「そう言ってるじゃん」

「うう……」

おずおずとしてスカートの中が見えないよう足の位置を調整すると、

かおを真つ赤にしたまま森川もプリント集めを再開した。そこまで気にすること無いじゃん、と思わないでもないが、まあ、それは僕が男であると同時に周囲に興味が湧かないという変な性質を持っているからだろう。

「おい、空深。お前、何をしている？」

あらかた集め終わったところで咎めるような声が聞こえた。振り返ればそこには今朝方僕と真に難癖をつけてきた奴がいた。

「笹川先生……」

なるほど、笹川っていうのか。この人の物理の授業を受け始めてすでに数ヶ月が経つけど、そうか、そんな名前だったのか。

「別に。森川がプリント落としたから一緒に拾ってただけですよ」

「……本当か、森川？」

「え、あ、えっと、はい……」

「そうか。後は私が拾っておくから行っていいぞ」

別にアンタの許可を貰う必要はねーよ、と内心で毒づく。露骨に「早くどっか行け」と言わんばかりの視線をプレゼントしてくれて、もうほとんど残っていないプリントを拾うために笹川もしゃがみ込んできた。

まあわざわざこの先生が拾ってくれるっていうんだ。厄介者扱いされてるわけだし、別に嫌な想いしてまでココにいる必要は無い。このムカつく先公に後を任せるべく、僕は立ち上がった。その時だ。

「う………？」

グニヤリと目の前の世界が歪む。天井が歪む、床が歪む、窓が歪む。笹川が歪み、森川が歪む。そして僕が歪む。左右が消え、上下が逆転し、時間が前後する。グルグルとめまいにも似た感覚が僕を包み込んで、気づけば僕は見知らぬ場所に立っていた。

ココはどこか。全く見覚えのない場所を僕は冷静に観察する。そこは何処かの部屋だ。それなりに高そうな一室で、部屋中に衣服や何やらが散らばっている。潔癖症と間違うほどにキレイにしろとは自分の部屋を棚の上の天井裏にまで上げても決して言えないが、ちつとは片付けたらどうだ、とも思わないでもない。とは言うものの、よくよく見れば部屋の隅に埃とかさういったものは見られない。て言うことは、普段から掃除はやってるってことが。

「あつ！ ああつ！？ ああああつ！！」

素っ頓狂な声が聞こえて、どっかで聞いたことある声だな、とか思いながら振り向くとそこにはついさっきまで一緒にいた笹川の姿。笹川は部屋の残念な惨状を見ると、靴も脱がずに部屋の中へと転がり込んだ。

僕のいた、まさにその場所を通り抜けて。

ガシャガシャとけたたましい音を立てて笹川は部屋中の引き出しをひっくり返していく。

「無い！ 無い、無い、無い、無いッ！！」

騒ぎながらアツチコツチを探しまわってその度に絶望したような声を上げた。頭を抱えて笹川は喚く。その叫び声をBGMにその景色はまたグルグルと歪んでいった。

「どうした、空深」

その声にハッと現実に戻る。そこは学校の廊下で、足元には森川と笹川。森川は不思議そうな顔をして、笹川はどこか苛立たしげな目で僕を睨みつけていた。

「いえ、別に……」

「ならさっさと行きなさい」

言われなくてもそうするさ。ここにいる理由は無いし、いたくも無い。

森川は何か言いたそうな顔をしてたけど、結局何も言えずにうつむいてしまった。まあ、いいや。さっさとココを離れよう。微かな声を背中で聞きながら僕は屋上に向かった。

空は晴れ渡り、鳥は自由に空を駆け回る。よく鳥を自由の象徴として表したり、鳥になりたいとかいう人がいるけど、僕はそうは思わない。確かに大空を飛んでいる鳥は気持ちよさそうで、何の柵も無いように見えるけれど、鳥にだって縛るものはある。鳥は飛べるかもしれないけれど僕らみたいに走りまわることもできないし、きつとできることは僕ら人間のほうが多い。だから僕は例え生まれ変わって鳥になれるとしても、やっぱり人間を選ぶだろう。

だけど、もう一度僕になれるとしたら、僕はそんな権利などこの屋上から全力全開で斜め上方四十五度で投げ飛ばしてやる。もっとも、そんな事したら僕の右肩は外れてしまうだろうけど。

できもしない事を妄想するくだらない思考をしながらくだらない街

を見下ろす。五時間目の授業はもうとつくに始まっていて、見下してるはずのグラウンドには誰もいないし誰の声も届いてこない。なのに僕はここでこうして一人座り込んでいた。

先ほど見た景色。アレは恐らく笹川の部屋だったんだろう。あの慌て様からして、たぶん、空き巣にでも入られたか。今までの経験からして、空き巣の被害にあうのは今晚。このタイミングで見えたって事はそれで間違い無いだろう。それ自体は何も思わないし、どうこうする気も無い。どこまで行っても僕は観測者にしか過ぎないのだから。

不意に様々な事が頭を過る暗い記憶。無力な自分。助けられなかった自分。助からなかった人たち。断片たちが頭の中を駆け回って、ひどい頭痛を引き起こす。気持ちが悪く、悪い。

どういうわけか悪い未来だけはやたらとハッキリ僕の持つ何かは見せてくる。その度に憂鬱になって、数え切れない程の未来を見て僕はいつしか慣れてった。

風が頬を撫でた。夏が近い、生温い風だ。木々がざわめき、薄い雲が太陽を覆い隠した。

僕は立ち上がり、出口へと向かう。その途中で街を半眼でもう一度見下ろした。何故か、街に見下ろされている様な気がした。

世界は変わらないし変える気も無い。例えどこかの国で紛争が起ころうが日本で地震が起ころうがテレビでデモ行進の様子が放送されただけの放送されないだの誰かが喚いていようがあまりちゃんが化けの皮を剥がして教壇の上で悪態吐いていようが真が財布落として地面にめり込みそうなくらい落ち込んでいようが何も変わらない。

「はい、おはようございます」

さっきのはただの物の例えで、実際には世界は平和で、あかりちゃんとは相変わらずの完璧に作り上げられた可愛い声でクラスに向かつて挨拶している。真だけは財布を落として沈んでるけど。

あかりちゃんはクラス全体を見渡して欠席者がいない事を確認すると、いつもなら「今日も一日ガンバロー」などと言って教室を出ていくのだけれど、今日は「お知らせがあります」などと言い出してニコリと笑った。

「なんと！ 今日からこのクラスに転校生が加わります！」

途端にクラス中がざわつき始める。すでにゴールデンウィークも終わって六月にさしかかろうとしているこの時期に転校なんて、物好きな家族もいたもんだ。

「しかも！ 喜べ男子！！ 転校生はかわいい女の子だ！」

おおー、と男子のみならず女子からも歓声が上がる。まあそろそろ二年生のクラスにも慣れてきて、変わらない毎日にマンネリ感が醸し出す頃だ。イベント的なものが欲しくなってるのも分かるし、それを考えればいいきっかけにはなる。

それでも関心が無いヤツは何処にでもいるし、そいつらは退屈そうにあかりちゃんを眺め、僕は僕で眠いから机の上のラップトップを閉じてその上に突っ伏してる。一応顔だけはかろうじて教卓に向けてはいるけれど。

「それじゃ入ってきて〜！」

間延びした声がして教室のドアが開く音がする。そして彼女は現れた。

真新しい白い上履きが教室に入り、そこから細い脚が伸びていく。転校生らしいシワ一つ無いチェック柄のフレアスカートが腰を覆って、濃紺ブレザーの裾が揺れる。

髪は長い。腰くらいまで届くだろうか。栗毛色に淡く染められたそれが、彼女が歩く度にハラハラと宙を撫でる。

静かな歩調であかりちゃんの隣に立つと、黒板に向かって丁寧な字で自分の名前を書いていく。カッカカツ、と小気味いい音を立てて書かれるその文字は女の子にしては珍しく丸なくて、習字でもやっていたのかな、と思わせるくらいにはキレイだった。

「> r u b y < > r b < 浅海・圭 > / r b < > r t < あさみ・けい > / r t < > / r u b y < です。宜しくお願いします」

落ち着いた口調で自分の名前を告げると、彼女はたおやかに腰を折ってお辞儀をした。キレイきっかり四十五度。お手本みたいなお辞儀をして顔を上げたところで僕は初めて彼女の容姿を確認する。

すっきりとした鼻筋にキリツとした眉が印象的か。ややタレ気味な目尻の下には泣きボクロがあり、落ち着いた雰囲気のせいもあってエライ蠱惑的だ。本当に高校二年生だろうか。正直三十手前だと言われても僕は驚かないぞ。

そんな事を考えてたらあかりちゃんと転校生両方に睨まれた。どうやら二人共読心能力があるらしい。なるほど、だからあかりちゃんは独身なのか。

背筋が凍るような思いを意図的に無視して、僕はまた顔を組んだ腕の中に埋めた。呆れた様なため息があかりちゃんから聞こえてきたけどそれも無視。

「それじゃ浅海さんの席は……空深くんの前でいいか」

なんでそうなる。確かに僕の列は他の列より人数は少ないけど、そ

れでもせめて一番前とか後ろとかだろ。ああ、ほら、周りもざわざわとし始めてるじゃないか。僕は人畜有害なんですから止めたほうがいいですよ。

「浅海さんもそれで良い？」

「ええ、構いません」

反論するのもメンドクサイ。ま、どうせそんなに関わりあう事も無いだろうし、最初は絡むこともあるかもしれないけど、すぐに彼女も離れていく。それに反論しても僕の言葉であかりちゃんが考えを改めるとも思わないし、好きにすればいいさ。

「宜しく願います、空深さん」

頭上からの大人びた声に僕は軽く手を上げて応えと、そのまま夢の世界に沈み込んでいった。

僕は夜の帳の中に立っていた。いや、立ち尽くしていたと言ってもいい。

まだ宵は浅くて、周りのマンションの廊下にはLEDが光っている。防音の行き届いたマンションは静かで、夜を夜らしい静かな空間を作り上げてる。閑静なんだろう住宅街は人通りも無くて、高級そう

な佇まいが羨ましい。ウチの昭和の時代から有りそうなボロアパートとは大違いだ。ときたま、とつくに滅びた様なガソリンエンジン車が国道から騒音をかき鳴らしてて、それを僕だけが聞いている。生温い風が頬を撫でる。不気味な風だ。まるで、全てを溶かし尽くしてしまいそうで気味が悪い。時折強く吹いて木が不快にざわめいた。狭い路地には街灯が等間隔で並んで、本来暗いはずの道路を明るく照らしていた。

そんな中で、僕のいる場所は暗い。街灯はチカチカと明滅してて、ひどく目に悪い。

何よりも目に悪いのは赤だ。足元は真っ赤に染まってる。どす黒いような赤いものがドロドロと流れて僕のスニーカーを汚す。

隣には工事現場。緑色のネットに覆われた奥には規則的に鉄骨が組み上げられていて、見上げると首が痛くなるほどに高い。遠く最上部には建設用のクレーンが鎮座してた。

そして僕の目の前には無骨な足場用のパイプが転がっていた。無機質で温かみを全く感じられない。

その隣に彼女も転がっていた。

大の字に手足を広げて、彼女の長い髪は硬いアスファルトに孔雀の羽の様に広がっていた。

眼は見開いたまま。そして瞬きせず微動だにしない。頭の一部が潰れてしまっているのが、点滅する街灯に照らされて分かった。

まだ彼女資材に潰されてから間もないんだろう。広がっていく彼女の血が僕にこびりついていく。

僕は一步彼女に近づく。ぬちゃり、と今度は音が耳にこびりつく。

顔を覗き込む。僕の知っている顔。

手を見る。ピクリ、と手が動いた気がした。

脚を見る。スカートが布ずれ音を出した。

もう一度顔を見た。

瞳の奥の深淵が僕を覗き込んでいた。

「——っ!!」

ひどく荒い自分の呼吸に我に返る。両目には涙が浮かんでいるのか、机の上にあるはずのPCの姿は歪んでいた。何だ、今の光景は。

グルグルと思考と視界が周り、考えがまとまらない。まとめようとも思えない。頭があらゆる思考を拒絶する。

何を見ていたのか、思い出せない。思い出せないのに、胸に残る不快感だけははつきりと残っている。思い出せないのに、はつきりと未来を見たことははつきりと思い出せる。

どこまでもはつきりと見えて、匂いも、感触も、全てが本物。肌寒さも、静けさも紛れも無く僕は感じていた。

なんてリアル。

なんて不気味。

なんて——無力。

瞬きをする度に景色が蘇る。それを僕は必死に押しとどめる。

僕は思い出さなきゃいけない。誰に何が起こるのか、それをキチンと記憶に留めなければならぬ。

だけど今は無理だ。さっきから呼吸が落ち着かない。汗は滴り落ちて机の上に溜りを作ってる。なのに体はひどく寒かった。

「大丈夫？」

あかりちゃんの声に僕はようやく顔を上げた。そこで僕はやっと今が授業中で、自分が立ち上がっているということに気づいた。クラス中が僕を見つめ、怪訝な顔をしている奴もいれば、今にも舌打ちしそうなほどに口を歪めてる奴もいる。

そんな中で真とあかりちゃん、それと森川だけが心配そうに見ていた。

「おいおい、顔真つ青だぞ。保健室に行くか？」
「いや、大丈夫……ちよつと風に当たってくる」

真の提案を断つて、僕は廊下の方へと向かう。何より今は落ち着くための時間が必要だ。あんなに、はつきりと生々しく未来を見たのは久々だ。気をつけないと胃の中のものを全て吐き出してしまいそうだった。

重い脚を引きずって歩き出す。

動き出す直前に見た、一つ前の席に座る転校生。僕を見つめる黒い瞳。瞬き一つせずに、細かったはずの眼が大きく見開かれていた。とても黒い黒い瞳。どこまでも深く、底が見えない。それが僕を吸い込んでいく。

知らずの内に僕はその瞳を覗き込んでいた。それと同じく、深淵が僕を覗き込んでいた。

そして僕は意識を失った。

僕は夜道を歩いていた。夜、というには少し早いかもしれない、しかし夕方というには遅い、そんな時間。>ruby<>rb<誰そ彼>/rb<>rt<たそがれ>/rt<>/ruby<というの

が適当かもしれない。

昼間は夏を感じさせるほど暑かったのに、この時間帯は「夏と呼ぶにはまだ早い」と地球が主張しているように涼やかだ。だけど風はどこかまとわりつくようで気持ちの悪さは残る。

気を失った僕が目覚めたらすでに放課後だった。保健室には誰もおらず、校舎は奇妙な沈黙が跋扈していて広いグラウンドからは野球部の威勢の良い掛け声が響いていた。

僕は部屋を飛び出した。適当に書き置きを養護教諭の机の上に置いて、教室に置いてあるカバンもそのままに暗くなり始めた街へ出ていった。

街中を歩きながら夢で見た未来を思い返す。十分寝たからか、思い出しても感情が揺れる事は無くて冷静に、客観的に記憶を辿る。

夢の中で見た彼女は間違いなく転校してきた女の子だ。名前は……浅海って言うていただろうか。地面に横たわっていた彼女の身に何が起こったか、現場の状況を思い出せば想像するのは真の奴でも分かるくらいに容易い。

事が起こる場所については分かる。あの景色には見覚えがあった。前にあの近くに住んでいたことがあって、もうずいぶんと昔の話だ。引越してから間もなくビルが沢山建ち始めて、見える景色は変わってしまったけど、だいたい場所は見当がつく。

風が強く吹きつけ、僕は眼をつむる。すでに現場近くにはたどり着いている。ココから見える建設中のビルは三箇所。ほぼ同時期に建設が始まったのか、どれも進み具合は同じくらいで、夢で見た未来の映像だけだと判別ができない。

「勘で探すしか無いのかよ……」

ひとりごちながら僕は脚を走らせる。時間はすでに無い。太陽は沈んでほとんど夜と表現しても差し支えないくらいになっている。夜の色に染まってしまった雲の流れは速い。

走りながら、僕は考えた。今、僕がこうして走っている事に意味はあるのだろうか、と。

どれだけ頑張っても、何も変わらない。そう、何も変わらないのだ。通学路で交通事故死する奴を止めた。次の日に同じ場所ではねられて死んだ。

飛び降り自殺する高校生を説得した。彼女はその夜にフェンスが壊れて転落死した。

銀行強盗が人質を射殺する未来を見た。あらかじめ通報すると、人質は別の銀行で強盗に射殺された。

僕が何をして、結果は同じ。誰一人として助けられなかった。

それから僕は諦めた。氣力を無くした。何を見ても、何をする事も無くなった。

怠惰に毎日を過ごし、判を押したように同じ毎日を過ごす。それ以来、悪い未来を見ることは少なくなっていた。だから僕はそれに満足した。

なら僕はなぜこうして走っているのだろうか。夢見が悪いから？彼女を助けたいから？暇だったからか？

息を切らしながら、クラスメートの姿を探す。風が強く吹きすさび、それが僕の足を止めようとしてくる。

理由探しながら後ですればいい。自分に言い聞かせて、現場付近を走りまわる。

汗が額から流れ、眼に入って痛む。全く、なんて割りに合わない。そう吐き捨てながら僕は今日来たばかりの女の子を探す。

辺りがほぼ真っ暗になり、全身が汗にまみれた頃、僕は彼女の姿を認めた。

街灯が路地を明るく照らし、その内の一つが黒く点滅していた。

強風が彼女の髪を揺らし、鮮やかに広がる。何も知らずに無垢な歩みを進めていた。

そばには建設途中のビル。遠くの国道から静まり返った住宅街に車

のエンジン音が響いた。

そして空には黒い影があつた。

不安定だつた足場が強風にあおられて揺れる。

僕は走つた。

足場が倒れた。

「浅海イツー！」

手を伸ばす。声に振り向いた彼女の顔が見える。感情に乏しい表情に乗つかつた黒い眼が僕を覗きこんでいた。

浅海に向かつて伸びた腕が、彼女に届く。

だけど、彼女は消えた。音も消えた。

彼女はどこに消えた？こちらを見ていた浅海圭はどこに行つてしまつたのか？右を見ても左を見ても彼女の姿はない。

崩壊した鉄パイプ類が足元に転がって靴へぶつかる。地面を見るとパイプが赤い水の中に沈んでいた。

彼女はそこにいた。眼を大きく見開いて無感情に僕を見上げていた。染み付いていく血の匂い。孔雀の様に彼女の髪が地面に広がつた。見上げる彼女を僕は見下ろす。僕を彼女の動かない視線が責め立てる。

一歩、後退つた。そして左足が後ろへ下がる。右足、左足。右脚、左脚。交互にそいつらが動いていく。勝手に動いていく。

そこから先は記憶に無い。気がつけば聞きなれた目覚ましがなつていた。

頭が働かないままに目覚ましを止め、ＴＶをつけて風呂場へと向かう。シャワーを浴びながら歯を磨いて眼が覚めるのを待つ。いつもは熱湯が出るはずのシャワーは、今日は機嫌が良いらしく素直に適温のお湯を出してくれた。

制服に着替えて、煎餅布団に腰を下ろしＴＶを眺める。興味の無い

ワイドショーチックな芸能ニュースを垂れ流し、タレントと化した女子アナが大げさにコメントを述べているのをただボーっと見ていた。

「さて、と……そろそろ行くか……」

アクビを何となく噛み殺してカバンを探してる途中で気づく。そう言えば昨日学校に置きっぱなしだったな。中に入れていた財布は大丈夫だろうか。

「ま、いつか……別に取られても大して額は入ってないし」

気にしたてしようがない。残ってればよし、無くてそれまでだ。そうなたらどうせ見つかりはしないだろうし。

風が吹けば崩れそうなボロアパートを出て人通りの少ない通学路を歩く。天気は良くなって、曇っているせいかちよっと肌寒い。

「——続いてのニュースです。昨日、神奈川県横浜市内の建設現場で建設用に組まれた足場が倒壊するという事故がありました。事故があったのは南区和泉のマンション建設現場で、十五階付近、高さ四十メートルの所から、昨日の強風に煽られて足場が崩れて落下。一時現場は騒然となりました。幸い、事故当時現場付近には作業員や通行人はおらず、けが人などはいない、との事です」

いつもどおりに学校に向かったわけだけど、どういう訳だかいつもより通りに人は少ない。それは学校近くまで行っても変わらなくて、ポツリポツリとしか生徒の姿も見えない。

「……？ 今日、何かあったっけ？」

見慣れない光景に頭をボリボリ掻きながら腕時計を見る。なるほど、人がいないはずだ。いつもより二十分くらい早い。どうやらウチの目覚まし時計は狂っていたらしい。

だからといって今更ウチに帰る時間も無い。ちつとばかり早いのが、たまには早めに学校にいるのもいいだろう。どうせやる事は変わらないし。

誰もいない教室で、あかりちゃんが来るまで一眠りでもするか、とか考えながら玄関を抜けて教室に向かう。誰もいない廊下はいつもと違って静かで、どこかひんやりとした、神秘的な雰囲気を持っているように感じられた。

慣れ親しんだ廊下を歩き、教室へ。恐らく誰もいないだろうその中へと入るべく、僕は扉を軽やかにスライドさせた。

「おはよう、空深くん？」

いるはずのない彼女が、そこにいた。

「——浅海、圭……」

- 2nd Who Can Understand Me? -

- 2nd Who Can Understand Me? -

「おはよう、空深くん？」

いるはずのない彼女がそこにいた。

たおやかに微笑み、小さく頭を下げた彼女の姿に僕は思わず足を止めた。

なぜだ、どうして彼女がココにいる。彼女は……死んだはずじゃなかったのか。崩れた足場に潰されて何も言わない暗い瞳で僕を睨んでいたじゃないか。

まさか生きていたというのか。僕が見た時はまだ生きていて、単に気を失っていただけとか。でもそれはそれでおかしい。僕は浅海の顔を見た。

妖艶に笑う彼女が怪我をしている様子はない。確かに、昨日見た彼女は怪我をしていた。真っ赤な血が流れ落ちて、それこそ死人と見間違っ程に、生きていたとしても重傷で、翌日にこんなにピンピンした様子で登校できるはずは無かった。

なら、彼女は誰だ？ 彼女は何者だ？ 浅海、圭は、何だ？

「どうしたの？　ずいぶんと怖い顔してるけど」

気がつけば彼女は目の前にいた。笑みを壊さないままに眼を細めて僕の顔を、眼を覗き込んでくる。見上げた口から吐息がそっとかかる。

「まるで、見ちゃいけないものを見てしまったみたい」

「っ！！」

ゾツとしたものが僕の背筋を走る。思わず僕は伸びてきていた彼女の手を力いっぱい払い飛ばした。

パシッ、という乾いた音が朝の教室に響いた。ハツとしてみれば、ブレザーの袖からのぞく彼女の白い手が赤く染まっていた。さすがに笑みは引っ込んだけど、特に驚いた様子も痛がる様子も無く自分の手を見ていた。

「嫌われちゃったみたいね」

どこか残念そうに言う。その表情に謝罪の言葉がつい出てきそうになったけど、乾いた口のせいでキチンとした音にはならない。ガラッ、と後ろでドアが開く音がした。振り向くと、森川がいた。

「あ…えつと……」

一体何を勘違いしたんだろうか。森川は僕と浅海の姿を認めるとどこか気まずそうに視線を逸した。しかもどこか顔も赤いし。

「邪魔が入ったわね」

冷たくそう言うと、浅海は「また後でね」と言い残して僕を置き去

りにして教室から出ていった。出ていく時にブツブツと独り言を漏らしている森川に冷たい視線を送りながら。

「ん、いや、でもまさか、そんな……うん、大丈夫、大丈夫……」

「森川」

「転校してきたばかりなのに……でも、愛に時間は関係ないって言うし……」

当の森川はと言えば、浅海の凍える視線にも気づかず頬を染めたり悶えたりと一人遊びに忙しいらしい。今まで森川の事をほとんど意識してなかったけど、森川ってこんな奴だったのか。みんなの前で今の姿を見せればきっと人気者になってくれるだろう。僕はオコトワリだが。

登校する生徒が増えて廊下がにわかに騒がしくなる。さっきまでのシリアスな教室の空気は吹き飛んで、すっかり緊張が解けてしまった。

頬に手を当ててクネクネとしている森川を現世へと帰還させるべく、もう一度声を掛けた。

「森川」

「あつそそそ空深くんっ！　　おおおはようっ！　　ああ浅海さんもおはようございますっ！」

「うん、おはよう」

森川らしくない元気な挨拶をして、これまた元気よく頭を下げた。その拍子に掛けていたメガネが落ちる。次いで肩に掛けていたカバンが滑り落ちて綺麗に真上から完璧に流れる様なタイミングでメガネを潰した。

「あああああっ！？」

「どんまい、森川。あと、浅海はもう居ないよ？」

「えええええっ!？」

世界は今日も朝から元気です。

鐘が鳴る。鐘が鳴る、とはいっても実際に本物の鐘がなっているわけじゃなくてスピーカーから流れるのは、本物と聞き間違えるかのように精密な電子合成音。無駄なところに技術が使われてるなあ、と寝起きのボンヤリとした頭で感心しながら背伸びをする。

午前の授業が終わり、担当の先生が出ていくのと間を置かずして教室内は一気に賑やかに。弁当を広げる奴もいれば学食に向かってダッシュしてる奴もいる。

「屋上に来なさい」

唐突に頭上から掛けられる声。見あげれば浅海が僕を見下ろしていた。

一気に意識が覚醒する。よくよく考えれば、彼女の後ろでよくもまああんなに熟睡できたものだ。自分の脳天気さが笑えてくる。

浅海はその一言だけ伝えると、さつさと教室から出て行ってしまった。クラス中が彼女の背中と僕を見つめる。恐らく有り得ない展開だとか好き勝手思ってるんだろう。

「何だ何だあ、夜よお。いきなり美人の転校生といい関係だつてかあ？ 女に興味なさそうな顔してやるなあ、おい。このむつつりスケベ」

「やかましい。何なら僕の代わりにお前が行ってきてくれよ、真」

「んな事できるかよ、バカ夜。圭ちゃんから直々のお誘いだぞ？ ここで行かなきゃ男が廃るってもんだろ？」

「別に廃ってもいいんだけどなあ……」

ていうか命令だったし。お誘いの空気は微塵も感じなかったぞ。

それに用件は朝の続きだろうし、それを考えたらクラスの男子が想像してる様な甘い展開なぞ僕には想像できん。

とはいえ、この空気で拒否もできないし、何より僕自身、彼女がなぜここにいいのか気になるのも事実。大人しく屋上へと向かうか。

「あの……」

教室を出て生き際に森川が声を掛けてくる。だけど朝の元気はどこに行つたのやら、僕が森川を見るとプイ、と眼を逸らしてうつむいてしまった。ちなみに壊れたメガネのアイムはセロハンテープで固定されてる。

何か用か、と続けようかとも思っただけど、廊下を歩く笹川の姿が見えたから止めた。きつとアイツのことだから森川と話してるだけで僕が一方的に絡んでると決めつけてメンドクサイ事になるだろうし。だから、森川に小さく手を振って僕は屋上に向かった。

屋上へは日常的に足を運んでるから、そこに至るまでの景色は代わ

り映えしない。同じ校舎なのだから見慣れていようが見慣れていま
いが代わり映えはしないのは極当たり前の話で、だけど屋上へ行く
のは禁止されてるから、全くといっていいほど人影は無い。それだ
けで特別な場所である感じがして、僕は好きだ。

人がいない空間というのは良いものだ。誰にも邪魔されず、自分だ
けの空間であってそこを犯す奴は誰一人としていない。何も僕を煩
わせず、だから僕はひどく落ち着くことができる。

ポケットの中から鍵を取り出す。家の鍵の中に混じって、屋上の扉
の鍵がある。僕が落ち着くために屋上へ行きたがった時、あかりち
やんがこっそり渡してくれたものだ。その鍵を手で弄びながら屋上
への階段を登っていく。

しばらく教室でボーッとしてたから浅海を待たせてしまったな。彼
女の事をあまり知らないが（当然だが）、今朝の笑顔とは裏腹にど
こか冷たい印象がある。森川を見る眼も冷ややかだったし、昨夜の
事といい、得体の知れないところもある。間違いなく何となく文句
の一つでも言われそうだ。いや、意外と細かい事は気にしない性質
の可能性もある。そうであって欲しい。

階段の最後の踊り場を曲がり、屋上のドアを見ると、浅海がドアに
もたれかかって待っていた。眠っているかのように動かずに、眼を
閉じてうつむいている。と、僕の気配に気づいたのだろうか、長い
まつげがゆっくり持ち上がり、柔らかさのない怜悧な視線が僕を貫
いた。

「遅かったわね。女を待たせるなんて、まったくなくてないわ。ま
るでダメダメな男、まるでだめ夫ね。これだから女の子の扱いを知
らない童貞むつつりスケベは困るのよ」

のっけからひどい言われようだった。

「むつつりスケベはともかく、僕に経験があるかどうかは知らない

と思うけど?」

「じゃああるのかしら?」

「いや、ないけど」

「……ハッ」

鼻で笑われた。しかも腰に手を当てて見下されて。いや、僕が階段の下にいるから見下ろされるのは当然ではあるけれど。

しかし、経験ある奴もいるかもしれないが、高校生でギシギシアンアンな展開を経験してるヤツは少ないと思うのは僕だけか。

「なら浅海はあるのか?」

「私をそこらの尻の軽い女と一緒にするなんてどういうつもり? まあ想像するくらいは許してあげるけど」

「けど?」

「肖像権の侵害で訴えてあげる」

許してねえし。

「そんな事より早く鍵を開けなさいよ。まだ私を待たせるつもり? それともまさか鍵を持って来てないとか言うつもりかしら?」

「そういうそっちは鍵持ってるの?」

「転校二日目で鍵を用意できる程私の尻は軽くないわ」

「その言葉の使い方は間違ってる」

浅海ってこんなキャラだったのか。転校二日目にしてお淑やかだかオトナっぽいとか言ってるクラスの男子達が聞いたらどんな反応を示してくれるかね。

そんな事を思いながらも、鍵穴に挿し込む。

「何だか鍵を挿すって卑猥ね」

「黙つとけ」

ドアを開けると廊下の湿った空気が抜けて、代わりに爽やかな風が吹き込んでくる。青空が広がって、それを見ていると何とも言えず僕の気持ちも自然に晴れやかになっていつてくれる。

背後でドアが閉まる。カチャリ、と鍵が閉まる音がした。

「それで、屋上に来て何の話……」

「動かないで」

唐突に僕の手がひねり上げられた。細い体のどこにそんな力が、と言いたくなるほどに力強くてミシミシと骨がなってるみたい。痛み顔に顔をしかめて文句を口に仕掛けたところで、冷たい物が僕の首に当たる。

「動いたら、死ぬわよ？」

太陽に反射して金属製の何かが光る。そつと横目で見てみると、鈍色にハサミが輝いていた。それも工作用のハサミじゃない。人を容易く刺せそうな程に鋭く尖った裁ちバサミだった。その先端が僕に向かつて押し当てられていた。

「空深、夜。アナタは昨夜何を見たのかしら？」

「な、何を見たって……」

「答えなさい。さもないと、私はアナタを殺さないといけなくなる」
「殺すって……」

「ずいぶんと物騒だと思うでしょう？ でもね、本当にそうしないといけなくなる」

そう言っただけハサミが僕に食い込んだ。軽く皮膚が破け、紅

い珠が首筋に浮かんで僕は感じた。彼女は、本気だ。

「私としてもせっかくのクラスメートで、しかも席が前と後ろだなんて親しくなれそうな人を傷つけたくないの。だから正直に答えてアナタは昨日の夜に何を見たのか」

「それは……」

言っているのか。浅海が、死んでいた、だなんて。死んだはずの人間が、まだ生きているだなんて。そんな非常識な事があるはずがない。僕が生きているのはフィクションの世界じゃなくて、面白くもない辛いだけの現実だ。だから僕が見た浅海の姿が真実なら、浅海はココにいてはいけない存在なんだ。

「浅海が……死んでいた……」

ならば、今僕の後ろにいる浅海圭は何者だというのだろうか？僕と話している彼女は誰なのだろう？

僕は殺されても文句は言わない。たくさんの死を見とってきたんだ。今度は自分の番だとしても不思議には思わない。けれど、僕を殺すのが誰なのか、それは知っておきたかった。

「崩れた足場に潰されて浅海圭は死んでいた。いや、死んでいたかは分からないけど、少なくとも今日明日で治る様な怪我じゃなかった。頭から血を流して、僕の靴を濡らした。真っ黒な動かない瞳で僕を睨みつけていた。だから、浅海圭が今日ココにいる筈はないんだ」

ゆっくりと顔を動かして、ハサミを持つ彼女の顔を見る。じつと漆黒の、死者の瞳で僕を見据えていた。

「君は、誰？」

「……質問をしてるのは私だけど、いいわ。答えてあげる。私は浅海圭。昨日確かに事故で死んで、でも昨日と同じ私がここにいる」「でも……！」

ならどうして君は生きているんだ。そう続けようとしたけど、彼女のハサミがそれを邪魔をした。

「その前に！ 答えなさい。その事を誰かに話したの？」

「……いや、話してない」

「家族にも？」

「僕に家族はいない。それに……僕は逃げた。浅海を死んだままにして僕は逃げた。救急車も呼ばず、警察にも連絡せずに。例えば家族がいたとしても話せるもんか」

「そう……」

ハサミが少しだけ首から離れた。やっと解放されるのか。そう思ったけど、彼女の手はそのままだった。

「最後に一つだけ。空深くんの家は事故があつた場所とは全然違うはずよ。どうしてアナタが発見したのか、教えなさい」

「それは……」

言葉に詰まる。たまたま用事があつて通りかかった。そう答えるのは簡単だ。だけど、ごまかすのはイヤだった。ごまかしたらいけない。根拠も何もないけれど、そんな気がした。

僕は一人だ。誰も僕を理解出来ないし、僕も誰も理解できない。僕の秘密なんて真実共有なんてできないし、そもそも他人の重い秘密なんて共有なんてしたくもないはずだ。でも抱え込み続けるのは難しい。数力月に一度、他人に全てをぶちまけたくて、吐露したくて、

助けて欲しくなる時がある。辛くて、息苦しくて、生き苦しい。今日という日がちょうどその日にあたったのかもしれない。脅エクスキューズされていた、という言い訳もある。だからか、僕は正直に浅海に話していた。

「僕は……未来が見えるんだ」

「未来が……？ 何を言ってるのかしら？」

「嘘に聞こえるかもしれないけど、嘘じゃない。僕には時々、近くにいる人の未来が見えるんだ。それも悪い未来だけははっきりと」

「ふうん……それでこの前倒れたわけね」

「あまりにもはっきりと……浅海が死んでた姿が見えて、でも目の前の浅海は生きてたからたぶん混乱したんだと思う。放課後に眼を覚ましてから浅海を止めようと思ったんだけど、間に合わなかった。ゴメン」

「どうしてアナタが謝るのよ？」

「助けられなかったから」

「でもアタシはこうして生きているわ」

「痛かったのには変わらないだろ？ だから、ゴメン」

打算混じりの謝罪を吐く。

浅海は僕に刃を向けたまま、じっと考え込んでいる様に黙っていた。動きも、呼吸すら止まっているかの様に静かだった。

どれだけ時間が経ったろうか。状態が変わらないと、緊張も次第に解けてきて、今の身じろぎ一つすらできない姿勢は中々に辛い。だから今の状態を変えるべく、僕の方から彼女に声を掛けた。

「……それで、僕の解答は正解なんだろうか？ いい加減この体勢も辛いものがあるんだけど」

「そうね……いいわ、とりあえずアナタの言葉を信じてあげる」

ただし。ハサミを離しながら、彼女は続けた。

「アナタの話に一片でも嘘が見つかったら、その時点でアナタを殺すから。そしてアナタだけが私の事で知っていること、それを第三者にバラしてもね。それでいいかしら、空深くん？」

「いいも悪いもないだろ？ どうせ選択肢なんか無いんだから」

「別にいいじゃない。女の子とこんな近くで触れ合ったことなんてどうせ無いんでしょ？ 役得じゃない」

「命賭けてまで触れ合いたくねえよ」

とはいえ、だ。張り詰めていた空気も解けたし、僕の方もやっと一息つけて思わずため息が出た。

少し痛む首筋を抑えながら後ろを振り向くと、すでに浅海は何処かにハサミを仕舞っていて、姿形も無い。……結構おつきいハサミだったと思うんだけど、何処に隠したんだ？

「いい女には秘密がいっぱいあるのよ。具体的には2つくらい」

「少なっ！？ てか思考を読むな！ ついでにいい女はいきなり刃物を突き出したりしねえし！」

「良いツツコミね。才能あるわよ」

「嬉しくねえよ」

「あら残念」

なら少しは残念がる素振りでも見せやがれ。

そんな僕の心中とはお構いなしに、浅海はクスクスと笑いながら踵を返してドアノブに手を掛けた。

「ちょっと待て。何勝手に帰ろうとしてるんだよ？」

「だってもう昼休み終わるもの。急がないとお昼食べられないじゃない。私は何があるうと一日三食キッチンと食べることを自分に課し

てるの。邪魔しないでよ?」

「浅海の信条は知らないけど、まだコツチの質問に答えてもらってない」

「また後で答えてあげるわ。いいでしょ? どうせ今、知っても後で知っても変わらないんだから。それとも何かしら? 今答えをもらわないと昼から眠れないとか女々しい事を言い出すのかしら? ハンッ、そんなだからいつまで経っても童貞なのよ」

「もうその話はいいから……」

眠れないとは言わないけど、気になるのは確かで、午後からずっとこの悶々とした落ち着かないまま過ごさなきゃいけないのかよ。いくら打算が多分に含まれてたからって僕の秘密を明かした対価がそれじゃあんまり過ぎる。

なのに浅海は素知らぬ顔でメンドクサイ結果になるであろう言葉をプレゼントしてくれた。

「あ、そうだ。私、午後からサボるから?」

「は?」

「空深くんの話を聞いて、色々調べないといけないことができたの。だから先生への説明宜しくね?」

「いや、ちよつと……」

「それじゃそういう事で。またね」

制止も何処吹く風。馬耳東風。馬の耳に念仏。微妙に意味が違ってる慣用句が頭の中に飛び交ってる僕を尻目に、彼女はスタスタと歩いて階下へ消えていった。

残された僕は呆然とせざるを得ず、微妙に赤く染まった首元と先生への言い訳を黙考することしばし。とりあえず全部放棄して不貞寝することを脳内会議で決定すると、この後の真の絡みを想像しつつ、彼女の後を追った。

光陰矢のごとしと言ったのは誰だったか。古典に全くと言っていいほど興味を持たない僕でも知ってる言葉で、だけでも言葉を最初に放った人物が誰であつたか思い出すことは到底僕のやる気では無理ではあるのだけれど、その言葉の意味というものを実感するのは非常なほどに容易い。何せ目をつむって目を開ければすでに放課後だ。我ながらよく寝たものだ、自分の体に感心すると同時に空恐ろしい物を感じてしまう。

教室に帰り着くやいなやクラス中の視線が僕に集中するのは予想通りで、真がニヤニヤとこれでもかと言わんばかりにニヤつきながら近寄ってくるのもこれまた予想通りではあつたけど、いやはや、その第一声までは予想して無かった。

「で……やったのか？」

いやらしい笑みを浮かべて突き立てた中指をクネクネさせながら肩を組んできた真をその場で殴り飛ばさなかった自分をぜひ褒めて欲しい。僕も真に笑いかけ、自分から真の肩に手を伸ばす。真を席に着かせると僕はそつとその頭に手をやる。「おっ！マジでやったのか！？」と下品に笑う真に微笑みかけると、全力で真の頭を机に

叩きつけてやった。

「……任務完了」

頭から白煙を上げる真を放置すると、僕はそのまま自分の席に突っ伏した。どうにもすぐメンド臭くなってしまうのは僕の悪癖の一つではあるが、これで周りからの不躰な視線も飛んでこないだろうし、たった一つの冴えた殺り方だと信じてる。浅海から受けた理不尽な扱いのストレス解消も兼ねてはいるのを否定はしないけど。

授業が始まって浅海の姿を尋ねる先生の声が聞こえたけど、誰も何も言わない。だいたい浅海のサボリの言い訳を僕がしなきゃいけない理由はない。が、頼まれたからにはしないとイケないだろう。「気分悪いんで帰りました」とだけつぶしたまま言っただけで、それきり何も追求が来なかったから僕は安心して安眠モードに入って、以上の事を回想しながら道を歩いてると、いつの間にか家の前に立っていたりするから不思議だ。

「まあ、夕べの事以上に不思議なことなんてそうそう無いだろうけど」

平穏が一番。これ重要。できれば僕の力も一生発動しなくていいんだけど。

「自分でどうにかならないものを考えても無駄か」

独りごちながら結論付けると、見慣れたボロ屋の門をくぐる。二階建ての、風が吹く度にギシギシどころかミシミシと崩壊も近そうな音がするのに、どうにか崩れずにちゃんと建っているのが不思議すぎる。もしかしたらこのアパートの存在自体が一番の不思議現象かもしれない。

鍵を挿し込んで一回し。カチャと音がしてドアノブをひねるけど開かない。

まさか泥棒？そんな疑念が過るけど、誰が好き好んでこんなボロ屋に盗みに入るといふのだろうか。いや、セキュリティはザルもザルなのでそういう意味では入りやすいだろうけど。

ともかく、もう一度鍵を回して開錠し、警戒しつつソッとドアを開けて中を覗き込む。

そして中にいた人物を見て呆けたのも仕方ない事だと思う。

「は……？」

「お帰り。早かったわね」

そう言っただけで出てくれたのは、今日の昼間に散々人をいたぶっていてさっさと帰ってしまった女王様だった。しかも制服姿に白いエプロン、頭には三角巾という古風豊かな格好で。

「なにいつまでもそんなところにつつま立ってるのよ。早く入りなさいよ」

「あ、うん」

目の前の光景にイマイチ頭が付いて行かない。もしかしなくても僕はまだ学校で寝ていて夢を見ているのだろうか？

「ちょっと待ってて。もうすぐで夕飯できるから。あと勝手に部屋も掃除しといたわよ」

浅海の言葉通り、狭い台所からは夕飯のいい匂いが漂ってきてるし、部屋も、元々対して散らかってはいなかったけど、キレイに整頓されててフトンも折りたたまれて端に寄せられていた。

……浅海、だよな？つい内心で確認を取ってしまう。外から帰って

きたらご飯が準備されてるなんて、何年ぶりだろうか。一人は慣れてるはずなのに、どういう訳か鼻の奥がツン、と熱い。トントントン、なんてまな板を叩く音一つ取ってみても懐かしさがこみ上げてきて、浅海の後ろ姿が、死んだ母さんの姿とダブって見えた。

「しっかし、狭い家ねえ。今にも崩れそうだし部屋は汚いし風呂場なんてカビだらけじゃない。よくもこんな家に住めるものだと初めて空深くんを感心したわ。きっとゴキブリやダニがアナタのお友達なのね。ああ、ゴキブリと同列に語っちゃ可哀想ね。ゴキブリが」

浅海は浅海だった。

ほっとけ、どうせただ物が少ないから整理されて見えるだけで、ほとんど掃除なんてしてない汚くてボロい家に住んでるダメ人間だよ！
って違う！

「なんで浅海がここに！？ しかも料理中！？ ていうかどうやってウチを調べた！？ そもそもどうやって入ったんだよ！？」

「昼間も思っただけど相変わらずツツコミのキレが良いわね。M - 1グランプリにでも出たら？」

「ボケなしで！？」

そんな事よりも僕の質問に答えて欲しい。何故に浅海がウチにいて料理なんか作ってるのか。どうやって中に入ったかはこの際眼をつぶって警察には通報しないでいてやるから。

「後でちゃんと話してあげるから、とりあえず風呂にでも入ってらっしゃい。出る頃には夕御飯もできてるから」

「……分かったよ」

何が狙いか分かんないけど、ともかくココは浅海の言う通りにして

おくか。別に盗まれる物は無いし、暖かい飯は出てくるわけだし。まあそれでも一応釘は刺しておこう。

「覗くなよ？」

「ポークビッツを見てほしいの？ とんだ変態ね」

「……」

もう何も言つまい。おとなしく黙ってシャワー浴びてこよう。

「あら、凶星？」

「ノーコメントで」

男だって秘密がある方が魅力的だ。そういう事にしておいてくれ。

で。

「……」

「……」

ズズー、と音を立てて二人して食後のお茶を飲んでたりする。流しには食べつくされた皿の山。浅海の料理がどういったものか、もしかしたら料理もどきの真っ黒な正体不明暗黒物質でも出てくるのかとも思っただけでなかなかどうして、久々の手料理だってことを加味しても十分うまかった。美人だし、浅海を彼女にできる男はきっと幸せな気分になれるだろう。

「何よ、人の顔をジロジロ見て。誰が視姦する許可を出したというのかしら？ さっさとその汚らしい眼をどかしなさい。肌が腐るわ」

口の悪さにさえ眼をつむれば。

「それで、ちゃんと話してくれるんだろうな？」

「ええ。もちろん話せない部分はあるけれど、教えられる範囲で話してあげる。私は口は悪いけど嘘は吐かないわ」

自覚はあったのか。

「じゃあ、まず一つ目。昼間の質問から答えるわ」

コトリ、とちやぶ台の上に湯のみが置かれる。まだ暖かいお茶からは湯気が立ち上っていてユラユラと揺れ、浅海はそれに眼を落としながら口を動かす。

「私は浅海圭。昨日空深くんが見た死体も間違いなく浅海圭、つまり私よ」

「そんなバカな。まさか生き返ったとか非現実的な事を言い出さないよな？」

「そのまさかなのよ。より正確に言えば、私は死んでなかったのだけれど」

「……嘘じゃないんだよな？」

「さっきも言っただけど、私は嘘は吐かないの。そうね……」

顎に手を当てる仕草を見ると浅海は視線を宙にさまよわせ、そしてどこからともなく昼間も見えたハサミを取り出した。何をするのか、と浅海を注視すると、突然浅海はハサミの刃を自分の手首に当てて躊躇いも無く切り裂いた。

「バカッ、何を……！」

「いいから黙ってみてなさい」

立ち上がり掛けた僕を浅海は落ち着いて制止すると、ボタボタと流れ出る赤い血をただ眺める。僕も言われた通り黙って見ていたが、やがて言葉を失った。

「血が……」

深々と切り裂かれた手首から血が止まり、濡れたそこを拭くと傷の無い、元の綺麗な肌が現れる。啞然としてそこをマジマジを見ていたけど、僕に向かって掛けられた平坦な声に意識を戻される。

「理解したかしら？　こんな体のせいで私は死にもしないし老いることも無い。だから昨日空深くんが見た浅海圭も、今こうして話してる浅海圭も矛盾しないの。ま、空深くんの中の常識にはケンカを売っているでしょうけど」

……信じられないけど信じないといけないんだろうな。浅海の言葉通りこれまでの僕の常識には反するけど、これも事実だ。まさかこんな人間がいるなんて、空想の世界だけだと思ってた。だけど気になる事が一つ。浅海の言い方だ。口調はもうだいぶ聞き慣れたいつもと同じ調子だけど、どこか自嘲するような、悲しげな響きがあったような気がする。浅海のこの体質が生まれつきのものなのか、それとも後天的な、何かきっかけのような事があったのか聞きたくもあつたけど、彼女のこの体の事にこれ以上触れてはいけない様に思えて、僕は口を噤んだ。僕があまり僕的能力について触れて欲しく無いように。

「浅海が元気な理由は納得しておくよ。今こうして目の前に浅海がいるわけだし、仮に今の話が嘘だとしても僕には確かめようが無いわけだしね。」

それで、次になんで浅海が僕の家にいるか聞いてもいいか？」

まさか空き巣つてわけでも無いだろうし、何か用事があつたからいるんだろうけど、残念ながら僕には相手の心なんて複雑怪奇なものは読めないし、未来だって自分の事は見えないからその用事が何なのかはサッパリだ。

「それは単純な話よ。私が空深くんに話があつたから」

「まあそうだろうね。できれば家主の帰りを待って中に入ってくれたら心から歓迎できたけど」

「なんで私が外で立ってなきゃいけないのよ」

「だろうね……で、その話って？」

「私に協力して欲しいの」

「協力？」

協力、ね……いったい僕に何を求めてくるのやら。中途半端な力しか持たない、無力としか思えない僕に何ができるというのか。期待してもらう分には自由だけど、結果は求めないで欲しいんだけどな。

「そもそも私がこの街に来たのは、ある人物を助けるため。そのために空深くんには私を手伝って欲しい」

「手伝うたつて僕には何もできないよ。だいたい、人助けなんてだいそれた真似、僕には向いてない。しかもなんで僕なのさ？ もっと他に助けてくれそうな人を探したほうがいい」

「残念ながらそうはいかないの。空深くんは私の秘密を知ってるし、アナタの能力が役立つ時があるかもしれない」

「浅海の秘密がバレる恐れがあるって事は……もしかなくても危

険だったり?」

そう尋ねると浅海はあっさりと頷いてみせた。

「ハッキリ言うと、命を落すかもしれないわね」

「なら断る。そんな重たい協力なんて僕の手にあまる。別の人に頼んでくれよ」

「さっきも言ったけど、協力を頼める相手は限られてるの。それに……私が助けようとしてる人は空深くん、アナタにも関係ある人なんだけど、それでも他の人に頼めっていうの?」

「……誰だよ、その、浅海が助ける相手って?」

「森川恵」

一瞬、呼吸が止まったような気がした。どうして、そこで森川の名前が出てくる? クラスメイトで、目立たず地味で、言葉は悪いけどコレといった取り柄もなさそうな森川の命が危ないんだよ。

「これは空深くんが協力を約束してくれてから話すつもりだったんだけど……森川恵は近々誘拐されるわ」

「なんでだよ? なんで森川が誘拐されるんだよ?」

「彼女はね、アナタと同じなのよ」

「僕と……?」

「そう。彼女は未来が見えるの。それもアナタと同じか、それ以上にね」

そんなバカな。僕と同じ能力者がそんなにポンポンといえるもんか。これまでの十七年間、誰もそんな力を知らず僕を理解してくれる人なんていなかった。なのに身近に……同じクラスになんているはずがない。

「信じられないって顔ね」

「そりやそうだろう？ 僕の力が珍しいことくらい僕だって分かる。なのにそんな近くに同類がいるだなんて信じろって言う方が無茶だ」
「ええ、確かに珍しいし、こんな、同じ学校に二人も見つかるなんて私だって予想外よ。でも、間違いなくそれは事実だわ。私が保証する」

「百歩譲って、森川も未来が見えるとする。でもなんでそれで森川が誘拐されることになる？ こんな役に立たない力で……」

「アナタにとつては役に立たなくても、周りから見れば非常に有用な力なの。それくらいはアナタの事だから分かっていると思うんだけど」
「買い被らないでくれ。こんな無能者の不良の事をどこまで当てにしているんだよ？」

「……話を続けるわね。もし、未来を見る力を完璧に扱えるなら、未来の情報を狂い無く手に入れられるならそれは野心さえあれば世界を支配することに等しいわ。常に相手の先手を打てる。個人には無理でも、力を持つ組織であれば世界構造を手中に収めるのは難しくない」

「だから協力しろって？ 冗談じゃない。そんなの僕ら一般市民からしてみればいわゆる『お上』が変わるだけじゃないか。僕らの、僕の生活が変わるわけじゃないし、権力闘争なら勝手にやってくれよ。僕には関係ない」

何も変わりはない。せいぜい与党が変わるくらいだ。僕の生活は今まで通り続いて、それは変わらない。何か変化があったとしてもそれは所詮規定された変化にすぎない。支配者が変わっても変わらなくても、世界構造が変化してもしなくても起こっただろう差分だ。そんなものに興味は無い。

「私も興味なんて無いわ。権力闘争なんてせいぜい狐と狸が化かし合っただけいいもの。私が言いたいのは、アナタの持つ能力にはそ

れだけの価値を見出す人間がいて、森川恵は誘拐されて人間としての尊厳を奪われる。それを私は止めたいだけよ」

浅海が体を乗り出してちゃぶ台に覆い被さる。俯いた僕の顔を覗き込み、彼女の黒い瞳に僕の歪な姿が写り込んだ。

「そして……それは空深くんも同じじゃなくて？」

「僕は……」

「ずっとアナタは助けられなかった。助けたくてもいつも最後は助けない相手がスリリと手から滑り落ちていく。そうでしょう？」

「……」

「これはね、空深くん、アナタにとってもチャンスよ」

そう言つて浅海はワラウ。いやらしく口端を歪め、その目は全てお見通しだと語つてた。グニヤリと歪んだ僕の姿から眼を離したくても離せない。

「誰にも理解されず協力者も無くて失敗してきた。なら協力者がいればどうなるのかしらね？ 相手を救えるのならば、空深くんに巣食う無力感も拭えるわ」

誰かを、救えるというのだろうか。そんな傲慢な考えが、僕に許されるというのか。彼女の眼がそれを肯定する。私に従えば大丈夫だと、そう言っているのか。

突然柱に掛けていた古い掛け時計が鳴った。深淵から這い出して見上げると、針は十時を指していた。それを合図としたかのように、浅海は僕の体から離れて元の位置に正座する。

「まあ、すぐに返事をもらえるなんて思ってたないから。しばらくその空っぽの頭で悩みなさい」

バカにした口調で、でも顔は普通に笑って浅海はそう言った。

「それじゃ私は寝るから。寝不足は美容の天敵だもの。また後で聞かせてもらうから答えは用意しておいて」

そうは言うけれど、答えを出せるのだろうか、僕は。でも、出さなきゃいけない。森川を助けるか、それとも見捨てるか。言葉にすればその程度で、正しいのは助ける方。でもその選択をするのは難しい。

「……分かったよ。んじゃ、送ってくよ。浅海の家はココから近いのか？」

「近いわよ。動く必要が無いくらいに」

「え？」

「今日からココが私の家だもの」

「……は？」

いや、意味が分からないんだけど。

意味を咀嚼するために固まっている僕の横で浅海はさっさとエプロンを外して、勝手に僕の布団を広げるとその中に潜り込んでいった。

「あの、浅海？ ココは僕の家のはずだけど？」

「そして今日から私の家。ああ、別に名義は変わってないし空深くんもココに住む権利はちゃんと有してるから安心して」

それじゃおやすみなさい、と言いたいことだけ言ってしまうと、浅海はあっさりと寝息を立て始めた。丸メガネの小学五年生もびっくりな速さだ。

「えーつと……」

寄る辺なく周期的に上下する僕が寝るはずだった布団を眺めていたけど、そうしていてもしょうがない。深々とため息をつく、電気を消して僕も適当に畳の上に寝転がって、体を抱え込む様に丸めて寝ている浅海に背を向ける。まったく、幸せが逃げたからため息が出るのか、ため息が出るから幸せが逃げていくのか。

静かになった室内で、浅海の穏やかな寝息だけが僕の耳に入る。それもまた僕にとっては久々の事だ。そう考えると少しささくれだつた畳の寝心地も悪くなく思えてきてしまう。

そんな事を考えながら僕も眼をつむる。そして僕もいつの間にか彼女と同じように寝付いてしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7024y/>

No One Knows Everything

2011年12月3日17時54分発行